

Glocal Cinema Meetup! 2020



プロジェクトレポート



Glocal Cinema Meetup!とは?

Glocal Cinema Meetup!は、東京都に居住または就学する「外国ルーツの若者たち」が取組んだ映像制作プロジェクトです。プロジェクトのメンバーは、自らの経験や日本での生活で得た気付き・視点を活かしたドキュメンタリー映画を映像作家と共に制作し、グループごとに短編作品を完成させました。

本プロジェクトは、参加するメンバーが地域や自身の生活を題材にしたドキュメンタリー映像作品制作を通じて、日常では接点が限られている人々や地域コミュニティなどとの接点を創出することを目的に、企画されました。

コロナ禍で直接人と交流する機会が減少したため、本プロジェクトを通して様々な人と出会えることを期待して参加したメンバーも多くいました。また、日本語に不安を抱えつつも、映像メディアを介して表現をできる可能性に期待して参加したメンバーもいました。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響と、二度目の緊急事態宣言によって活動は限定され、制作のほとんどがオンラインとなりました。当初描いた取組みとは異なる活動になったグループもあります。しかし、各グループの完成までの過程を概観すると、オンラインだからこそ丁寧に対話を積み重ね、自身が考えていることと向き合えたというケースも多々見られました。

参加したメンバーが地域の方やコミュニティと直接的に出会うことは難しくなりましたが制作したメディアコンテンツを通じて、多くの方々に彼らの考えや想いを届けられる可能性は、企画当初以上に高まったと感じています。

是非、「多文化共生にはどんな可能性があるのか?」という社会を豊かにする問いを、多くの場で様々な方々とともに考えるコンテンツとして使用いただければ幸いです。



Ark & Maya: All Mixed Up



映像制作教育の可能性



近年、先進国の教育現場ではメディア・リテラシーを育む教育手法として、映像制作を行う取組みが増えています。オーストラリアでは、シネマ（映画）とリテラシー教育（識字教育）を掛け合わせた「シネリテラシー教育」が2000年から公教育で実施しています。

今回のGlocal Cinema Meetup!でも、このシネリテラシーの教育手法を参考にしています。多文化多民族主義のオーストラリアでは、多くの国民が外国にルー

ツを持ち、多様な文化背景を有しています。それらの相互理解を促すため、映画を制作する過程で多様な考えに触れるシネリテラシーが、学校教育で取組まれているのです。日本では、東日本大震災と原子力発電所の事故によって、故郷から避難を強いられた福島県の被災地を中心に、子どもたちが故郷や地域と主体的に向き合うための教育として採用されました。その後、東京都など都市部における地域理解の取組みにも、活用されるようになりました。



各グループの取組み

今回のプロジェクトに参加したのは、中国ルーツの若者たち、アフリカンルーツの若者たち、そしてそれ以外の国にルーツを持つ若者たちです。彼らは、ルーツごとに3つのグループ（中国、アフリカ、多国籍）に分かれ、3つの短編作品を完成させました。

紹介する完成作品はYouTubeにて配信しております。
ぜひご覧になってください。



中国ルーツのグループ

作品名：

生活如料理 人生は料理のように

制作背景：「食べることは、家族にとっても文化にとっても大切なことだ。」という考えを持つメンバーが、食べ物を切り口に中国と日本での生活に向き合いました。生まれ育った故郷を離れて日本で生活をする、改めて食文化について考える機会が増えたことに気づいたメンバー。異なる文化を受入れながら自らを形成していく、『人生の調味料探しを楽しむ』をコンセプトに制作しました。

制作は、完全にオンライン。メンバーが家庭での調理や食事の場면을撮影する他、現在日本で暮らしている場所や、中国で暮らしていた時の場所の写真などを集めて構成を試みました。作品タイトルやナレーションで使われている詩的な表現は、メンバーが対話の中で創作したものです。異文化の中で生活する難しさと、可能性を表しました。



アフリカンルーツのグループ

作品名：

Ark & Maya : All Mixed Up



制作背景：「黒人だから〇〇といった、マイクロアグレッション(無意識な攻撃)や、ステレオタイプを壊すような作品にしたい!」というメンバー共通の想いがありました。そこから、それぞれが日常的に感じ、考えていることを対話しながら語ることを、作品制作のスタートにしました。

17歳の高校生が自らの半生と向き合い語ることは、とても難しい面もありました。しかし、彼女たちが真剣に自身と向き合って言葉を紡いだことによって、多様なルーツを持つ当事者のリアルな気持ちや考えを、自然な形で受け取ることのできる作品に仕上がりました。構成から編集、題字や音楽まで、メンバーが最後までこだわって完成しました。



多国籍グループ

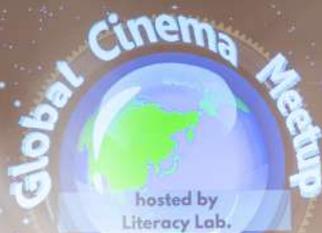
作品名：

Dear 2020 マスクの下の僕たち

「いつリアルで会えるかな?」インド、エチオピア、フィリピン、ネパール…国籍もルーツも異なるメンバーは、毎週の打合せの度にそう語り合いました。こちらも、オンラインで集い、スタートした作品です。メンバーが初めて直接会えたのは、完成作品上映会でした。

オンラインのみでの作品制作では、それぞれが「今感じていること」や「今この東京で生活している当事者として考えていること」をテーマに、スマートフォンで撮影した動画を持ち寄って進められました。メンバーで共有しながらコロナ禍の多様な視点を表していくことを試んでいます。母国との比較やこれからの日本での生活、将来の夢など、それぞれが自身と向き合い、メンバーと対話を積み重ねて完成した作品は、コロナ禍であるからこそその大切なメッセージに溢れていました。





上映会イベント



プロジェクトの最終日には、劇場型の大型スクリーンが設置されている早稲田大学小野記念講堂にて完成作品上映会を実施しました。プロジェクトに参加したメンバーたちの取組みに賛同した東京都やオーストラリア大使館からも来賓が出席され、メンバーたちの挑戦に祝福のメッセージをいただきました。

上映会は、アフリカンルーツのメンバーによる司会で進められ、各作品の上映後に制作したメンバーが登壇して、取組みの感想や支えてくれた方々への感謝の気持ちを発表しました。また、上映会はオンラインでも同時配信され、国内外から申し込みのあった多くの方々に取組みを知ってもらう機会となりました。



プロジェクト参加者の司会進行



上映後の感想



主催団体謝辞



東京都



オーストラリア大使館



So I can express myself
自分を表現するために

プロジェクト参加者の感想

「映画作りの中で、自分のわからないところに向き合って、自分をもっと理解できた気がする。あと、単純にカメラを使って楽しかった。」

「凄く楽しかった！これまで動画を撮る時は何かを表現したい辛い時期が多かったけど、今回はとても楽しく、これで生き甲斐を感じるようになった！」

「私たちの作った作品を会場やオンラインで観てくれてありがとうございます。」

「私たちが作った映画を観てくれてありがとうございます。こんなグループのメンバーと、こんなプロジェクトをやれて本当に嬉しいです。」

「ナマステ！ありがとうございます！関わってくれた多くの皆さんに感謝を伝えたいです。こんな機会をいただきありがとうございます！日本に来て2年間の中で最高の一日でした！」

「映画を観てくれて、ありがとうございました。この映画を作って、みんなで多くのことを学ぶことができました！」

上映会参加者の感想

「どの作品からも強いメッセージを感じました。オンラインの参加でしたが、皆さんとお会いできてうれしかったです。ありがとうございました」

「制作にあたったメンバーたちがそれぞれのルーツを大切にしながら、自分を広げていこうという前向きな姿勢が伝わってきました。多くの人々に見てほしいですね。」

「私も小～高校まで外国にルーツをもつ同級生がいたので、彼らの立場を理解することにつながったと共に、昔に戻ってもっと交流したいなと思いました。」

「言語の壁など色々な悩み、モヤモヤ、とある中で最終的にはポジティブな結論をだして前に進んでいく姿をみて元気をもらいました。この年齢で自分の感情や経験を言語化と映像化できることはとてもすごいことだと思います。」

おわりに



作品上映とプロジェクト実施のご案内

今回、Glocal Cinema Meetup!で制作された3作品は、関わったメンバーの学びに限らず、作品を観ていただいた方々にも「多文化共生とは？」を考えるきっかけを与えてくれる作品となりました。地域や学校、職場やサークルなどで、気軽に多文化共生について考える機会の創出に活用いただければ幸いです。また、今回のプロジェクトを参考にし、映像教育プロジェクトを実施したい自治体や団体がいらっしゃいましたら、お気軽にご相談ください。映像メディアの制作を通じて、日常の中に溢れている多様な資源に目を向け、皆で対話を積み重ねながら、豊かな地域づくりを進めていくきっかけが生まれることを願っています。



発行：一般社団法人リテラシー・ラボ
URL：<https://www.literacy-lab.org>
mail：info@literacy-lab.org

発行日：2021年3月25日
デザイン：ナガタニ・ヘイソン・ニャー